
VRMMOのおかげで美少女なマフィアの娘に求婚される。

佐倉風弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VRMMOのおかげで美少女なマフィアの娘に求婚される。

【Nコード】

N2088BA

【作者名】

佐倉風弦

【あらすじ】

和風のVRMMO、ヤマト・オンラインをプレイしていた俺はクラスメイトである美少女、要を助ける。

普通なら、素晴らしい恋のはじまりと考えられるが、要はマフィアの娘だった。

本人は美少女で優しくても親に殺されかねない。

001、助けたのはマフィアの娘。

現在、世界中でVRMMOが流行していた。

従来のVRMMOは特定の空間にダイブしてプレイするものだから、大抵はかなりの金がかかり、貧乏人にはなかなか手が出せない。必要な物全てを揃えるのに大体サラリーマンの給料二ヶ月分らしい。

当然子供にはそんな大金用意することなどできず、親に買ってもらおうにも家計は火の車なんだからどうにもならない。

とりあえず俺は問題なかった。べつに普通のゲームで十分に満足できていた。

けど、妹は違った。妹は、空間にダイブして自ら戦うことができるといふシステムに憧れを抱いていた。

どうしても欲しいと駄々をこねる妹のために安いVRMMOを探し回るようになった。

それで見つけたのが、ヤマト・オンライン。どういっわけか、子供の小遣いで買えてしまった。

他のVRMMOとは違って、和風らしい。中世ヨーロッパ風を妹が期待していたなら申し訳ないが。

なぜ、このヤマト・オンラインだけは安かったのか。

目の前には新緑の草原が広がっていた。
太陽の明るい光を浴びて輝く草原は、綺麗で良い風景だった。
少なくとも、目の前に魔物がいなければ。
正面に視線を移すと、真っ白な首が何本もあり、うねうねと何とも言えない身体を持つ《白蛇》が立ち塞がっていた。
聞いていていい気はしない奇声を発して口からは紫色の霧のようなものを吐き出している。

俺は、上を見る。

そこに表示されていたのは、HPバーとMPバーである。
HPもMPも最大までである。
戦う上で問題はないだろう。

そして、自分の隣に視線を移す。

そこには、一人の少女が座り込んでいた。
サラサラした糸のように細い黒髪を肩まで伸ばし、一つだけ小さな白いリボンをつけている。可愛らしい顔立ちで巫女服に身を包んでいた。

俺は《白蛇》に視線を移す。

武器は何も持っていない。

その時、《白蛇》が動いた。

いくつもある首のうちの一本が素早くこちらに伸びてくる。
その首は鋭い牙を剥き出しにしていて、噛まれたりしたら一溜りもないだろう。

少女は目を見開いてオロオロしはじめる。

魔物が攻撃してきているのに対して、俺が何の武器も持っていないのをまずいと思っているのだろう。

けど、武器はなくても戦える。

素早く《白蛇》の首を避け、その首を素手で掴んだ。
暴れ回るので、そう長く止めておくことはできない。

首を掴んだまま、もう片方の手を振り下ろす。
その瞬間にスキルが発動する。

正面に緑色の文字列が表示される。

《風斬り》

緑の輝く光がその首を貫通し、切り落とす。

ぼとりと首が落ちる。

なかからは、緑色の血が流れ出ていて正直気持ち悪い。

こういうことを考えると、素手ではなく遠距離から攻撃できる武器の方がいいと思うのだが。

切り落した首を一瞥し、本体をじっと見据えた。

本体は焦ったように後ずさる。

そして、慌てて姿を消してしまう。

当然のことだが、逃げられた場合、経験値は入らない。

……あんなにすぐ逃げ出すとは、ドラ エのメ ルスライムじゃあるまいし……。

とりあえず俺は少女に視線を移した。

俺は、今ままでここではこの少女に会ったことはなかったが、現実世界で知ってはいた。

最も話したことはなかったのだが。

確か、名前は桜坂さくらざか 要かなめ。学校のクラスメイトで優しい人柄と端正な顔立ちのせいで男子には人気だった。

しかし、人気がありながらも彼女に言い寄る男は一人もいなかった。

確か、父親がマフィアだとか噂を聞いていたけど。

じつと見ていると、彼女ははつとしたように慌てて立ち上がった。
頭を下げて、

「ありがとうございます、助かりました！」

そう礼を告げる。

細い髪が揺れる。

礼儀正しくて、とてもマフィアの娘だとは思えない。

それにしても……どうしてこの子がマフィアの娘なんだろう。

マフィアの娘でなければ、ここは絶好のチャンスだったというのに。

こういう緊張した場で、男が女を助ける。恋愛ものの王道のような状況。

うまくいけば、ここから素晴らしい愛の世界が展開できたかもしれないが、いくら容姿が良くてもマフィアの娘ならべつだ。

仮に好意を寄せられれば、この子の親に殺されるなどという話もあるかもしれない。

まさか、女に好かれたのが理由で殺されるのはごめんだ。

要は、じつと俺の顔を上目遣いで覗き込みながら尋ねてくる。

「あの……、神原 飛鳥君ですよね……？」

「……さ、さあな、人違いじゃないか？」

両手で顔を隠しながら、そう言ってみる。

これで明日にでも、現実世界で彼女の取り巻きの前で話しかけられたりしたら暗殺でもされかねない。

「あ、あの、何かお礼を……」

彼女が顔を上げて言おうとするが、それを制止した。

そして、相手を不快にしないように、にっこりと笑顔を浮かべた。

「礼なんかいらない。困ってる人を助けるのは当然のことだからな」

むしろ、この態度が余計に相手の好感度を上げたことには後で気づくことになった。

要と別れると俺は、妹を探して回った。

町の入口まで行くと、門の前で妹の春麗しゅんれいが立っていた。

黒い髪を二つに結ってくりくりした目で袴姿でピョンピョン飛び跳ねて手を振って来る。

「お兄ちゃん、久しぶりっ」

「そろそろログアウトするぞ。小学生がはしゃぎすぎるところなくなとがないからな」

「むー、ひどいよ」

今日はこれで終了だった。

事件は、学校に登校してから起る。

いつもと同じように木製の少し古びた校舎に入り、教室までいくと自分の机にカバンを置いた。

もうクラスメイトのほとんどが来ていて、話し込んでいた。

「あ、あの……」

背後から声をかけられ、振り向いた。

目に入ったのは、サラサラした流れるような黒髪。

昨日の美少女が、自分の背後に立っていた。

彼女が顔を赤らめて言葉を放つ。

「飛鳥くん、私と結婚してください！」

今日で人生が終わるな、これは。

002、兄は大抵シスコンになるものである。

「私と結婚してください」

突然言い放たれた要の言葉にクラス中が静まり返った。

どのクラスメイトも固まってじっとこちらの様子を伺っていた。

俺の目の前にいるのは、紛れもなくこの学校で一、二を争う美少女でマフィアの父親を持つ要だ。

要はじつと俺を見つけていた。

どっと冷や汗が噴出してくるような気がする。

この教室は、要の親の部下達が盗聴器でも仕掛けていているなどということはないだろうか？

いや、親バカだったりしたらやりかねない。

どこで盗聴されているかも分からないこの状況で、危険過ぎる。

仮に盗聴されていなくても、ここにいるクラスメイトが噂をバラまいたりしたらどうする？

うっかり要の親の耳にでも入れれば、間違いなく消されるだろう。

とにかくこの状況を何とかしなければ。

「あ、ああ、昨日君が言った結婚ごっこか。しかし、ここは学校だから」

とりあえず適当なことを並べて要の腕を引いて慌てて教室を出た。しかし、結婚ごっこって何だ、ごっこって。

よく考えれば高校生にもなって何とかごっこかするわけがない。この歳になっても、中身はガキのままの痛い奴だと思われてしまっうこともある。

でも、要に好意を寄せられていると周りに思われるよりは痛い奴と思われた方がマシだ。

廊下で話すといつ誰が通るのか分からないで、しばらく歩き続ける。

木製の廊下は古くなっていて、歩くためにぎしつと床が軋む。

大丈夫なのか、この学校は。

近いうちに崩壊でもするんじゃないのか。

理科室に入るとドアを閉め、誰もいないことを確認すると要に問
いいただきました。

「どついつことなんだ？」

要はそう聞かれどつと俺を見つめたと思うと視線を逸らして顔を真っ赤にして、両手でどしどしと目をこすったり後ろを向いてみたりと動き回っていたが、やがて椅子に腰掛けた。

要はどつとこちらを見上げて何も言わずに膝に両手を置いて座っているだけなので、俺から何か切り出すことにした。

一度大きく息を吸ってから、言葉を発する。

「俺は、結婚どつことかするよな歳じゃ

「どつつこなんかじゃありません！」

珍しく要は大声を張り上げた。

恐る恐る様子を伺ってみると、ぶくつと頬を膨らませていた。どうやら怒ってるらしいけど、正直可愛いとしか言いようがない。

「これは真剣な話なんですっ」

「じゃあ、君は本気で俺と結婚したいと思ってるのか？」

「そうです」

「言っておくが、俺は婿養子になんか行かん。神社を継いでこっそり暮らしていくつもりなんだ」

「ちゃ、ちゃんと私がお嫁さんに行きます」

真剣な表情でそう告げられ、どうしていいのかわからなくなってしまった。

確かに将来は結婚も必要にはなるだろう。

一応父の跡を継いで神社をやっつけていかなければならないし、子供も必要になるだろうから。

しかし、相手は選ばなければならない。

いくら美少女で性格も良いとしても、相手と結婚して自分が早死にするようなハメになっては困る。

できれば俺も長生きはしたいわけで。

それに、要が美少女で人気があると言っても、俺が要を好きであるとは断言できない。

一応、ある種の憧れは抱いているが、それが恋だとは言い難い。

俺は腕を組み、要に言い聞かせる。

「結婚というのは、両想いでなければできない」

「は、はい」

要は何かを期待するような眼差しでそわそわしながらこちらを見てる。

頼むからそんな目で見ないでくれ。

俺は、にっこりと笑ってみせた。

「けど、俺は君に恋はしていないんだ。だから、この話は不成立と
いうことになる」

空は赤みを帯びていて、周囲に新緑の葉をつけた木々が生い茂る
土地の中央にぽつんと存在する神社に帰って来た。

神社にはお賽銭箱と大きな鈴があり、お祈りができるようになって
いる。

俺は裏口に周り、小さなドアを開けてなかへと入った。

木製の床と天井はきれいに掃除されていて、ホコリも見当たらな
い。

自分の部屋まで行き、ちゃぶ台の前の座布団に座るとがっくりと
うなだれた。

ヤマト・オンラインを買って初めて損をした。

ヤマト・オンラインが安い理由は、アバターを作るための機能が
存在せず、現実の世界の姿のままプレイしなければならない。

そのため、何か問題が生じても顔が明かされてしまっているから
逃げられないなどということもある。

俺は全くそのことを気にしていなかった。

ゲーム内で問題が起きれば、現実世界にも及んでしまうことがある。だから、発売当初は批判を受け、大幅な値下げに至ったと。とりあえず初めて後悔した。

頭を抱えていると、パタパタと足音が聞こえて来て春麗が部屋に飛び込んできた。

ランドセルを放り投げると笑顔で。

「お兄ちゃん、ゲーム！」

「……………ダメだ」

春麗はぶくーつと頬を膨らませた。

「何でー！？ ダメだよ、友達と約束してるのに！ もう、お兄ちゃんはやらないんだっいたら一人でやるもん！」

「それはダメだ。………… もう一緒にやるから安心しろ」

俺は春麗に一人でやらせるのはよくないと思っている。

春麗はまだ小学生だし、誰かに騙されたりするかもしれない。

顔も割れてしまうわけだから、ゲームで絡まれたロリコンに現実でもストーリーカーにあったりしたらどうする？

過保護だと父にも言われるが、断じて普通のことだ。

………… 要に出くわさなければいいが。

要はヤマト・オンラインにログインし、武器屋で装備を整えていた。

石造りの狭い店内にぎっしり並べられた槍や扇子、手裏剣、刀などをじっと物色していた。

これは、何と云えばいいのだろう。

春麗が武器を買うからとここまで来たが、いきなり要がいるとは幸い、まだ要はこちらに気づいてないようなので俺は身をかがめて春麗の後ろにいた。

これで見えないはずだが。

ふと、店のなかに人が入って来た。

少し長めを黒髪を後ろで一つに縛り、端正な顔立ちで袴姿の青年である。

彼は怒りを剥き出しにした表情で要に声をかけた。

「どづいうことなんだ、要！ いきなり男に求婚するなんて！」
「……………」

まさか、既にあの話は広まっているのか？

いや、マフィアの娘で美少女な要が突然男に求婚したら話題にならないはずはないかもしれない。

「お兄様、どこで聞いたんですか？」

兄だと？ 既に要の家族にまで？

要の兄は腕を組んで

「お前の学校の子が言った。ねえねえ、あの桜坂さんが神原君に

求婚したんだって、本当？ すっごいね、神原君は要さんのお父さんに撃たれたりしないのかな？心配だよね！ だとか噂になっていたんだ！」

何も喋り方まで再現する必要はないんじゃないか？

せつかく端正な顔立ちをしているというのに、台無しなのは？

「どこの馬の骨とも分からない奴と結婚するなんてお兄ちゃんは許さないぞ」

自分でお兄ちゃんとか言った。

もはやイケメンが台無し以外の何者でもない。

どうやらあの兄はシスコンらしい。もし、見つかったりしたら面倒なことになるのは間違いない。

「お兄様、私は恋をしてるんですっ」

「いいや、恋じゃない！ 一度助けられたただけだろう。要は、女が男に助けられて恋に落ちるといふシチュエーションの漫画が好きだから勘違いをしているだけなんだ！」

「いいえ、違います！」

要はぶくぶくと頬を膨らませる。

何なんだこの兄妹は。

気づけば人が集まって来ているし、人前で言い合いして恥ずかしくないのか。

美男美女の兄妹の言い合いは流石に人の興味を惹いていた。

その様子を見ていた春麗が何かに気づいたようで、要を指差して言った。

「あー！ あの人の人、お兄ちゃんに求婚したお姉ちゃんだ！」

「春麗!？」

いきなり何を言い出すこの小学生は！
春麗は首を傾げて俺を不思議そうに見る。

「でも、何で振っちゃったの？ 神社の息子だから処女は捨てちゃダメなの？」

「春麗、俺の場合は処女じゃなく童貞だ」

要の兄がゆっくりとこちらを見る。

頬を引きつらせて、額に青筋が見える。

ああ、これは。

「要に求婚された上に、処女が大事だから要を振った……だと？」

求婚を受けても受けなくても悪い方向にしかいかないだろう、これ。

どづいことだ。

あと、処女じゃなくて童貞だ。バカなのか。

この状況を、どう切り抜けると。

003、妹にだけ優しい二重人格はうざい以外のなにものでもない。

「貴様が神原君か！」

要の兄は鬼のような形相でこちらに近づいて来る。

ものすごい迫力で、流石はマフィアの息子だと納得してしまった。しかし、これはまずい。

あの兄はどう見ても憤慨している。

どう弁解してもダメな気がする。

要さんが俺のことを一方的に好きで、俺は好きじゃないんですよなどと言ってもいっそう怒らせるだけだろう。

どうするべきか迷っていると、要の兄は胸ぐらを掴んできた。

「俺の妹をたぶらかすとはどういう了見だ！」

もはや俺は悪役にされている気がしてならない。

困っていた女の子を助けただけでこうなる理由が全く理解できない。

いくら何でも理不尽すぎないか。

この場で殺られるのか？

いや、ゲーム内に本物の銃は持ち込めないだろうから、それはないだろうが、現実世界ではいつ殺されてしまうか分からない。

何としても、ここで何とか宥めておかなければ。

「わー、お兄ちゃん頑張れーっ！」

春麗は可愛らしい笑顔を浮かべてパチパチと拍手を送ってくれた。いや、拍手はいららないんだ。

俺は遊んでいるわけではないんだ！

「兄のピンチなんだぞ、妹！
心配ぐらいしてくれてもいいんじゃないのか？」

「やめてください、お兄様！」

助けを待っていると言が慌てて間に割って入ってくれた。

要は兄を押し戻す。

要の兄は、きつと要を睨みつけて声を荒げる。

「何を言ってるんだ！ アイツは要を弄んだというのに」

何だこの兄は。

次々へとでつち上げるのはやめてくれ。

俺の記憶には、要を弄んだものなど一つも見当たらない。

素直に対応しただけというのに、なぜそうなる？

むしろ弄ばれたのは俺の方なのでは？

それを、勝手に俺を患者に仕立てあげようとは、殴りたくなくなってきた。

しかし、ここで殴ったりすると後で始末されかねないから堪える
他ない。

要は、ほっぺを膨らませて兄を睨め返していた。

「私、飛鳥君に暴力振るおうとしたり悪く言う人は嫌いですっ！」

「嫌い……？」

相当なダメージを受けたらしく、よろよろと後ずさり、膝をついた。
た。

放心したような様子で呟く。

「要が俺を嫌いになる……？」

ざまあみると鼻で笑ってやりたくなつたが堪える。

「そ、そんな……。要……お兄ちゃんは要に嫌われたら……」

周囲に人がいるというのに、シスコン丸出しとはある意味すごい気がする。

お笑い芸人でもやれるんじゃないのか？

あの美形と中身のギャップで何気に人気が出そうだ。

要は花のような愛らしい笑顔を浮かべて兄の頭を撫でる。

「嫌いになんかなりませんよ　飛鳥君にひどいことさえしなければ」

最後に俺にとってありがたい言葉を添えてくれた。

要の兄は、ぱっと顔を上げ言い放つ。

「分かった！　飛鳥君にひどいことはしない」

何で君づけなんだ？

「……非常に不本意だが」

小声でそんなことを付け足すあの兄を本気で殴りたい。

奴はジロリと俺を睨みつけた後、要に向き直ると笑顔を浮かべた。その態度の変わりようが余計に腹立つ。

要が兄の腕を引いて来て、少し動揺しながら話しかけてくる。

「ごめんなさい、飛鳥君。この人は、私の兄で」

要がくいつと兄の裾を引っ張るとそれが合図だったのか、兄はこ
ほんと咳払いして真剣な表情で。

「桜坂 冬馬だ。先程はすまなかった。悪気は全くなかったんだが」
「ほう……？」

先程とは全く違って、クールな優等生か何かみたいなお困りで挨拶
をしてくる。

悪気はなかった、だと？

あれだけ言っておいて、悪気がないとは有り得ない。

「俺は、何もしていないのにでっち上げられて胸ぐらを掴まれて悪
者に仕立て上げられそうになったことも全く気にしてないから安心
しろ」

にっこりと笑顔で手を差し出した。

冬馬もにっこりと爽やかな笑みを浮かべて俺の手を握る。

握手を交わした。

思い切り、相手の指が折れてもいいと思いつつ力を込める。

そうすると、向こうも力を込めてくる。

とりあえず要達には聞こえない小声で言ってみよう。

「仲良くしてやっても、いいが……くれぐれも俺の妹に欲情するな
よ、変態」

「そっちこそ、要に妙な手出しをしたりしたら、命はないと思え」

ちなみに俺はコイツとは違ってシスコンではない。

ただ、まだ小学生の妹が変なロリコンに付きまとわれていかわ
しいことをされないか心配してるだけだ。

妹は絶対嫁にやりたくないなどというシスコンまっしぐらでは…

…。

「ねえねえ、せっかくだし要さんも冬馬さんも一緒に遊ぼうよ！」

春麗がいきなりそんなことを言い出した。

何を言ってるんだ小学生。

「春麗、それは……」

「え？ だって、一緒に遊んだら仲良くなれるよ」

いや、仲良くなってはダメなんだ。

仲を深めてしまうと、マフィアの目の敵にされる可能性が高くなってしまう。

今ならまだ大丈夫な領域かもしれないんだ。

これ以上踏み込むわけには。

「そうですね。わ、私も飛鳥君のことよく知りたいので」

要もこちらをチラチラ見ながらそわそわした様子で呟く。

「ここは、どうなんだ？」

断ったらまずいのか？

シスコンの冬馬がいるから、ここで断ったら命が危うくなるかもしれない。

「そ、そうだな」

俺が笑顔で対応すると要はぱあっと天使のような笑顔を浮かべた。

結局、四人で草原を散歩することになってしまった。目の前に広がる新緑の草原は、太陽の光を浴びて煌めいている。本当にゲームのなかなのか疑ってしまうほどのリアルな空と草原である。

空漠と広がる空を白い鳥が羽ばたき、大きな輪を描いている。

それを見上げながら歩いていると要が隣を歩いてきて、手を握ろうとしてくる。

さっとかわすと要は、不満そうに見上げてくる。

マフィアの娘でなければ、即座に食いついていたのに。

神社の息子だから、童貞を捨ててはいけないということはない。

それがダメならば、父さんも母さんと結婚して俺が生まれるということはなかったはずだ。

跡継ぎは必要だからな。

歩い足取りで前方を歩いているのは春麗だった。

スキップをしながら楽しそうに歩いていて、結った髪が揺れている。

「あー！」

春麗は急に足を止めてこちらを向く。

「どうした？」
「あそこで女の子が」

春麗の指差した方向へと視線を移すと、確かに女の子がいた。女の子はその場にうずくまり、巨大な緑色の身体に真っ赤な目で背中にはきれいとは言えない八工つばい羽を生やしていた。

あれは確か《緑羽》だったか。

いや、今は魔物の名前を思い出している場合ではない。

その《緑羽》はうずくまる女の子に何度も体当たりして攻撃しているのだ。

女の子の持っていたらしい武器の棍棒はまっ二つに折れて地面に転がっていることから、抵抗する術がないんだろう。

早く助けた方がいいと思い、袖をまくり上げていると、冬馬が腰に携えていた刀身の黒い刀を引き抜き、一瞬で《緑羽》と女の子の間を駆け抜けた。

すると、《緑羽》はまっ二つに身体が切断され、緑の血のシャワーを降らせて光の粒子となり消え失せた。

その場に経験値となる数字が表示され、冬馬のステータスバーに吸い込まれていく。

女の子は立ち上がると、冬馬に頭を下げた。

「ありがとうございます」

「この辺りの魔物は少し強いから初心者が安易に来てはいけないだろ」

「す、すみません。ちょっとレベルが上がって来たかなと思って調子に乗ってました」

ペコペコと頭を下げる女の子。

冬馬は偉そうな態度で腕を組んで。

「次からしつかり計画を立てなさい」
「は、はい」

しかし、えらく態度が違うんだな。

要と話す時は、お兄ちゃんは許さないぞとか言ってるというのに。いわゆる二重人格ってやつなのか？

女の子は冬馬の説教を受けた後、慌てて走って行ってしまった。何だか不憫に思えてきてしまった。

もう少し優しくできないのか？

助けて大丈夫か？ ぐらいは言った方がいいだろ。

「冬馬さんは強いんだね！」

「もちろんだ。俺は何をするにも手を抜かない」

春麗が拍手を送るのに対してそう答える冬馬。

軽くブン殴りたい。

そう考えていると、要がぎゅーっと腕をしがみついて来て頬を染めながら告げる。

「男の人が女の子を助けるのって素敵ですよね」

「……まあ、そうだな」

「だから私も……」

「俺は君のことを好きなわけじゃない」

要はむっとした様子で言う。

「私は、諦めません。あらゆる手段を使っても、振り向いてもらいますっ」

あらゆる手段だって……？

まさか、マフィアの娘だから脅す気なのか？

路上で突然誘拐されて、監禁されてなんてことが普通に起こりそうで怖い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2088ba/>

VRMMOのおかげで美少女なマフィアの娘に求婚される。

2012年1月6日10時38分発行